

研究ノート

明治の「生意気娘」たち（中）

——「女学生」と小説——

小 関 三 平

IX.

21年の夏、『浮雲』第3篇を待って二葉亭を援助していた金港堂の中根香亭は、やはり言文一致体の『薺の鶯』を出版した。これの話題性は、なによりまず、17才の現役女学生が女学生風俗を描いたことにあった。しかも、著者は、元老院議員を勤めた田辺太一（蓮舟）の令嬢だった。だが、翌年1月の読売新聞には、女学校を出たばかりの16才の娘が、英国に留学するヒロインを描く長篇を、連載し始める。この著者の父親も、当時の名物男で、牛肉屋「いろは」の木村莊平（莊八・莊十の父）である。

前者＝「花圃女史」は、すでに、女学雑誌に短い随想の類を二篇、実名で書いていた。また、後者＝「曙女史」の前に、10回連載の小説『夜の錦』を読売新聞に書いた、筆名「蘆屋よし女」なる女学生がいた。¹⁾ だが、彼女は周囲の圧力もあって、やや旧風の短篇を端折って切り上げ、正体不明のまま埋れてしまった。推薦者は篁村だった。²⁾

こうして明治閨秀小説を先駆けた二人の娘＝花圃と曙は、共に東京高等女学校に籍を置いた点を除けば、境遇・動機・主題・文体のすべてに亘って、はなはだ対照的である。

『薺の鶯』は、鹿鳴館の舞踏会での男女学生の会話から始まる言文一致の中篇で、言わば「軽薄体」で女学生風俗を描く。対極を成すのは、「西南某藩」出身

で成り上った子爵の令嬢・浜子と、両親を亡くして弟と長屋に住み、編物の内職して学費を稼ぐ苦学生・秀子である。西洋かぶれの浜子は派手好き・遊び好きで、親など眼中になく、婿となるべき養子の義兄・勤が英国留学中に、軽薄な官員・山中に惹かれて駆落ちする。が、そこへ彼の妻と称する蓮葉女が現われ、欺されたと知った時はすでに遅かった。

西洋文化に幻滅して帰国した勤は、家出した浜子に、養父が死ぬと遺産を分けてやったが、それが山中の目当てだった。勤は、「温順で怜悧」で「生いき氣がない」と友人が評する秀子を識り、和歌の心得まである奥床しさとけなげさに感動し、盛大な結婚式を挙げる。そこで噂に上る浜子は、落ちぶれたが「断然さとして」悔い、「真成ほんとうのクリスチャンなりに成きって」いるという。

だが、この作の特色は、真剣に時勢や結婚・職業を論じ合う、女学生の会話にある。画家や理学者を夢見た二人の独身主義者は、師範学校に進み、やがて「才学」を以て世に知られ、作者の分身とおぼしき、分別臭い中庸派の文学少女・浪子は、文学士と結婚して「共かせぎ」したいと言い、その望みを果たす。百年余も前のこの作に「共かせぎ」の語を見ると、いささか驚いてしまう。すでにこの頃、「自立」や「共働き」が、切実な選択肢だったとわかるが、教職しか生計の道はなかった。

作者自身は、3年後に、巖本の媒酌で、花形評論家・三宅雪嶺（←雄二郎）と結婚するが、その後も小説の筆を捨てず、名士の妻にして閨秀作家の先駆たる地位を保ち続けた。

だが、生意氣娘の最たるこの女学生作家は、処女作がほんの筆のすさびだったと、公言して憚らない。洋行中に罹病し夭折した兄の3回忌の費用が要ったし、『当世書生氣質』を読み、これなら書けそうと思った、などと言う。³⁾ だが実際には、推薦者・逍遙の手が入っていたし、序文を寄せた福地桜痴（←源一郎）も版元の中根も旧幕臣で、父・蓮舟の知己だった。しかも、その師は中島歌子と巖本善治である。彼女のデビューは、稀れな幸運に恵まれていた。

花圃は、明治女学校から転じて東京高等女学校の専修科に在籍していたが、

同じ学校の本科をその春終えたばかりの曙は、海外留学の夢を父に一蹴され、心に染まぬ結婚を強いられ、「いろは」浅草店の帳場に坐り、使用人たちを指揮していた。彼女は、率先して洋服を着たり、舞踏・英語・仏語にも長じた、伝説的なスターであり、学生だった有賀長雄が恋したと伝えられる。だが、彼女の母は、のちに正妻となったものの、当時は木村莊平の愛人たちの一人だった。しかも、父は教養人でもなく、娘に対して専制的だった。強いられた結婚生活もたちまち破綻する。恐らくは、溢れる思いを、筆に托するほかなかったろう。篁村との縁については誰も説明していないが、この流行作家は店の常連だったのかもしれない。

『婦女の鑑』は、22年の新春から連載され始めた。第1回の同じ頁には、洋行帰りの森林太郎の『小説論』が並んでいる。⁴⁾ つまり、曙は10才上の鷗外と同時にデビューしたことになる。しかも、16才の娘が、いきなり33回もの長篇を連載したのは、後にも先にも例がない。

文体は、花圃のとは対照的に、旧風の七五調で、冒頭の叙景などは、まるで浄瑠璃の道行きを思わせる。彼女は江戸の草紙類の愛読者だった。⁵⁾ けれども、着想たるや、驚くほど大胆・斬新で、ヒロイン・秀子は、女学生には違いないが、なんと、ケムブリッジ大学の優等生なのであり、しかも、卒業すると大西洋を渡り、米国では一工女となる。そして最後には、数奇な縁で結ばれた外国人たちと、衣料品の輸出を目指し、貧婦を雇って二食・托児所付きの工場を興す。まるで、オーウェン風である。

旧士族・吉川家の令嬢・秀子は、姉に倣って留学する希望を持っていたが、嫉妬した友の企らみで、男性と交際していると親に誤解され、留学の許しを取り消される。そこで夢破れ、「不孝」を恥じもするが、意を決し、外国で名を成して帰れば親に認められるだろうと、詫び状を残して家を出る。渡航費は、彼女に恩ある娘が、ひそかに身を売って整えた。もちろん、秀子はそれを知らない。

彼女の才学は、英国でも級友の嫉妬を招き、そのために危うい目に会うが、

貧しい一家に救われる。成績優秀につき賞まで受けた彼女が、名前と身分を偽って米国の工場に潜入したのは、織物の米国風の好みを知る為だった。が、滞米中に貧しさから盗みを犯した男を警官の手から救ったり、工女たちの苛酷な労働を知って、社会の暗黒面に目を開かれる。『女工哀史』に先立つこと37年、当時の小説にあって、こうした視線はまったく異例だった。外国が舞台となるのは、『佳人之奇遇』に做ったのだろうが、ここでは政治と革命ではなく、工場と婦人労働が描かれるのである。

才媛の筆と誰の目にも映る花圃の作は、まず、彼女と縁の深い巖本によって、文の「優美流暢」と「西洋流行の弊害を戒め」る見識を賞されたが、「実穿的小説家として終る」ことなかれ、と釘を刺された。⁶⁾ 忍月は、さすがもう少し厳しく、「天真の才気」を認めつつも、「小説に最も必要なる条件を備へざる遺漏欠点」を指摘した。⁷⁾ だが、半世紀後に、宮本百合子は、「やみがたい内心の叫び」がなく、浪子が支配者たちの女子教育論を代弁すると批判しつつも、「時代の波の影」が「なんという生々しさで」さし込んでいることか、と感歎を隠さなかった。⁸⁾

なぜか、曙の作に対しては、同時代の批評が見当らない。推薦者の篁村が「清紫の亞流世の風潮によどみて無形の美をあらはすこと少なき」ことを嘆いて、彼女を世に出したのに、⁹⁾ 女流の文運隆盛を鼓舞する女学雑誌が黙殺したのは、不可解である。同誌が、閨秀作家に文学観を問う連載で、彼女の回答を掲げたのは、1年以上も経ってからだった。この作の不評は、おそらく、あまりに古風な文体と人情、また、「馬琴流の荒唐」と宮本が評した筋立ての作為ゆえだろう。だが、その宮本は、曙が文学に導き入れた「社会的生産的題材」を後代が発展させなかったと嘆き、この作が「心にのこる何か」をもつ、と評価する。¹⁰⁾

が、秀子の零細な工場を「アナクロニズム」と笑殺し、手芸などという上流婦人の趣味を女性の職業とするのは、鹿鳴館のバザー並みの「偽善」だと、野口愛は断じた。¹¹⁾ 当時の産業の実態を誤認し、小説界の水準と作者の年令・生活史を無視した、暴論である。

曙は、他に幾つかの古風な短篇を残したが、作家生活は2年に満たなかった。登場の翌年（23年）10月に、世を去ったからである。享年18才だった。読売新聞は、東洋のG. エリオットあるいはG. サンドとならざりし彼女を悼み、女学雑誌は、学友・植村清花の一文を載せた。曙の処女作に、「苦悶のやり場」と「世に対する訴訟状」を認めた塩田良平は、女性の新しき道を、恋でも家庭でもなく、殖産・興国への参加に見た閨秀に注目し、「現実^いに敗れた聡明な女性」が、啜り泣く弱い女とならず、「却ってそのために^い弥が上にも燃え立つ己れの夢」を、「せめて尺^{せうけん}縑の上に」描こうとした精神苦闘史である、と鎮魂の言葉を贈った。¹²⁾

同年令の樋口夏子（→一葉）は、無念の思いで進学を諦め、令嬢たちに囲まれながら、萩の舎塾で和歌の修業に励んでいた。曙の死から2年後、彼女は小説家としてデビューする。この「生意氣」な後輩を後押しした一人は、姉弟子・花圃だったが、一葉の記憶には、曙の名も刻まれていただろう。だが、後者は、前者の貧窮と鬼才の影に隠されてしまった。

花圃と曙の処女作は、若き閨秀の登場ということ以上に、時代の重要な過渡相を刻印する点でも、意味深い。まず、彼女たちを生んだのは、「開化」の所産たる女学校であり、また、20年前後の文芸熱だった。現に、女学雑誌は、19～22年にかけて、「女子と小説」（27・29・32号）、「女子と文筆の業」（79・80号）、「佳人論（二）詩人小説家の佳人」（105号）、「女小説家続々として出づ」（145号）、「女小説家」（152号）、「女流小説家の小説」（153号）、「女小説家と高等女学校」（154号）といった論説・雑報を掲載し、その大部分を書いた厳本は、芸術とりわけ文筆の道が女性に適する、と力説して、女学生たちを励まし、あるいは女流作家の未熟を叱りもした。また、その間、14・104・137・154・159の各号では、フェリス・桜井・明治・梅花・神戸英和（→神戸女学院）などの女学校に生れた文学研究会や文集を、奨励の意味をこめて紹介した。23年創刊の『女学生』誌は、京浜15校の文学研究会の連合を母胎としたものである。

女学雑誌は、当時最先端の文芸誌にして総合雑誌の原型であり、錚々たる知

名の士の論説・小説・詩歌・評伝・翻訳を掲載したが、同時に、全国の女学生の投稿を歓迎し、採用した。

だが、『浮雲』がお勢を、『薺の鶯』が浜子を、この雑誌の愛読者としたのは、流行を追う軽薄娘への作者たちの皮肉である。彼女たちはいずれも欧化かぶれし、親への礼と孝に背き、貞淑の徳を欠く。これは、この高級誌を誤解させるものだが、「女学」自体への反感・懷疑も強く、世間には、女学校＝女の洋学＝「生意気」とする偏見があった。

花圃は、浜子の噂をする山中に「あの西洋好きにも困るよ。傍へよるとなんだか毛唐くさくって」と言わせ、洋行帰りの勤に「男女だかれあって蹈舞するなんどは。あまりみともいいことでもない」とか、女学校では和歌を教えるべし、我が女房には「従順の徳」を望むとか、語らせる。彼女自身、幼少時から歌塾で永く学び、「国風」に深く染まって育ったのである。

他方、曙は、秀子を姉の国子に比して積極的な行動家としたが、姉妹は共に「孝女」であり、その家族・友人はすべて、礼節と恩義を重んじ、儒教的な礼教の徳を体現している。そして、秀子は、「倭の品」を用い「倭の風」で造る衣料品を、輸出しようと努める。実は、これが曙自身の夢だった。学校時代の彼女は、洋装で目立ったが、服の生地は国産たるべしと主張し、日本の手芸の伝統に改良を加えれば、女の手内職ともなり貿易と国威発揚にも役立つと語って、その実地修業のための留学を夢見ていた——と、先述の植村は回想している。¹³⁾

誰も注意しないが、彼女の作品の題は、2年前に全国の女学校に下賜された『婦女鑑』に、そのまま倣い、この下賜に先立つ「女子の服制に関する皇后宮の御思召書」（20年1月）に、「能く国産を用ひ得ば、傍ら製造の改良をも誘ひ、美術の進歩をも導き、兼て商売にも益を与ふる」とあるから、曙—秀子の理想はこれに合致する。

20年と言えば、まだ、「産業資本」と言える程のものは成立していない。が、女学雑誌は繰返して「女工」や「養蚕」に触れており、生糸は輸出品の首位だった。「御思召書」は、時宜に適していたのである。この殖産思想の胚胎は、「不

平等条約」の屈辱に対する自覚と、それに伴う「国家」意識の胎頭と重なり合う。外的状況は、列強の東洋侵略の脅威を一段と身近に感じさせていた。こうして、20～22年の頃は、欧化から「国風」の見直しと強化への、大きな転換期となり、政府は、新たな国家秩序の形成を急ぎ始めたのだった。

20年、21年にそれぞれ発刊した『国民之友』、『日本人』は、スタンスを異にはすれ、それらの誌名が示すように、「国民」または「民族」を強く意識し、一種の危機感と国家的アイデンティティ志向に基いており、そういう立場から、女学校に対しても批判を加えることになる。それはのちで触れよう。

他方、文芸の商品化と作家の職業化が、徐々に生れ始める。が、その過程で、女学生（あがり）は、読者の風俗的関心を惹く存在となり、時勢風刺の素材ともされ易くなるのである。

X.

曙の連載が終ると、酒色に耽る耶蘇の女教師を描いた『くされ玉子』（都の花、2月）が現われたが、これは、皮肉にも帝国憲法発布と同じ月だった。この作は先に触れたが、言文一致の佳作であり、嵯峨の屋の代表作の一つとなったものの、新聞小説でないせいもあってか、世間の話題や論議の的にはならなかった。ところが、次の月から改進黨新聞（3～5月）に連載され始めた暴露小説風の『濁世』は、たちまち「教育界の腐敗」と「女学校の墮落」への非難を呼び起すきっかけとなった。坎坷山人なる筆名で書いたのは、実は、当代一流の人気作家・須藤南翠である。

これは、いずれも博士号を持つ高等女学校長と講師が、女学生や私立学校の女教師に「恋慕」したり、それに「貴女学校の女教授」や「耶蘇教師」、女医学生や大学生などを絡ませて、教育者の裏面を描いた際物で、寥々子の評によれば、「表面には善行の容子を作る人々」の「廃徳醜行」は、読み通すに耐えない、と言う。¹⁴⁾

この作は、大きな連鎖反応を引き起した。幾つもの新聞が「醜聞」を書き立

て、東海新報は耶蘇系の数校を名指しで中傷した。その経過は村上信彦が詳説している。¹⁵⁾

俄かに拡がったこの女学校攻撃に対して、女学雑誌で激しく反撃したのは厳本だったが、他の数校の校長たちも憤激し、三校長連名で東海新報を告訴し、平謝りした新聞社を更にきびしく追及して、掲載した謝罪文を二度まで修正させた。

しかし、新聞は執拗だった。キャンペーンは、23年の春まで続く。2月になると、読売新聞が、「女学生の醜聞」という連載で、さまざまな具体例を読み物風に仕立て上げ、他方で日本新聞が、「某ドクトルの話」を紹介して、東都の女学生の間に花柳病が蔓延していると書き立て、読売新聞は再び「女学生の品行」問題を、数度に亘ってトップ記事にさえした。当然、厳本は激怒し、新聞社に詰問した。当初は高飛車に應對した社側も、次第に逃げを打ち始め、記事は社員が書いたものではないなどと弁解した。が、日本新聞の記事は、やがて、「ドクトル」なる者は医学生で、廃娼論に反対するために女学生花柳病説を捏造したことが、判明したのである。

女子教育のレベル・アップへの反感と批判は、なによりまず、22年頃から帝国大学総長・加藤弘之やベルツが主張した「女子高等教育無用論」に勢いを得た。もちろん、それは女子の「婦徳」放棄への不安に基く「良妻賢母」思想に相伴うものだった。が、それだけではない。問題の女子高等教育が、急激な欧風の知識・思想・流儀に影響されることに、深刻な疑惑が抱かれたのであり、「耶蘇の学校」が槍玉に挙げられたのは、その代表とされたからである。そして、この欧風化の危険視は、不平等条約と当時の東洋情勢によって、ますます強められた。また事実、欧化政策は、維新以前まで連綿と続いた旧来の文化を、あまりに軽視・無視する傾きがあった。つまり、或る意味で「反動」は当然だったのである。

「高等女学校」と言えば、初めは東京女子師範の付属高等女学校を指したが、これが攻撃されたのは、20年前後にはまだ、花圃が描いたように、多分に鹿鳴

館風だったからで、しかも、唯一の官立校である以上、他に範を示すべしとされたからだった。また、当時の校長・矢田部が、女子教育における基督教の効用を認める発言をしたことが、国風派を刺激した。更に加えて、新教育理論の唱導者・教頭の能勢米が、矢田部らと共に出していた『国の基』第3号に、或る極論を載せたことが、油に火を注ぐことになった。それは、「如何なる男子に嫁すべきか」を論じて、政治家・商法家・農家・工業家・医者・軍人をすべて不可とし、1) 学者、2) 洋行者、3) 性質活発・品行方正、4) 文筆の才・著述、5) 世間に知られた見識——を、必要な条件としたのである。たしかに、功利的観点からすれば、教育ある妻には有利に違いない。だが、教育の国家的・社会的機能を重視する立場からは、猛烈な非難を浴びざるを得ない。能勢は、もともと奇矯な言動も多かったが、この一件が致命的となり、やがて退職に追い込まれた。彼は、厳本によってもきびしく弾劾されたのである。¹⁶⁾

XI.

『嫁入り支度教師三昧』などという、いかにも冷やかし半分めいた題の戯作風小説が現われたのも、読売新聞のキャンペーンの7ヶ月後、23年10月である。著者は、意外にも、山田美妙（斎）である。

平凡な勤め人の一人娘・志保子は、「すこぶるつきの醜婦」ながら「伶俐さかしく、学問も好き」なのが取柄で、両親は、「時勢不通」の親戚どもの反対を押し切って、女学校に入れ、嫁入り資金を稼ぐための教師業に就かせた。初任給は父親の月給の半分にもなる。

が、勤務先の教師仲間の風紀はわるく、仲良しの同僚・富江の影響もあって、新聞は化粧品品の広告しか読まず、お洒落に精出し、貸本屋にこっそり通い、親の読めぬ英文の怪しげな手紙がしきりに届いたりして、母親は気が揉めて仕方なく、口論が絶えない。

突然、富江が「不品行」の故に免職となるが、実は、校長の誘惑をはねつけたからで、校長は前にも裁縫教師を同じ目に会わせていた。そこで、志保子は、

その名も清き「精華女学校」に転じるが、ここは女校長が有名人で、月給も少し上る。

ところが親の安堵も束の間で、娘の挙動に不審多く、月給の上った分は家に入れず、帰るとその振舞いは「だるうゐんも胃^{かぶと}を脱ぐ退化」ぶりである。夜は居残りと称して、遊びに来る富江とふしだらな話に耽っている。女校長は「当座の相手」の許に通っているらしく、十二時頃まで帰らない。それを噂しては、「産科を御存じだから懷妊避妊自在」などと露骨な言葉を吐いたり、自らも「為くじるやうな覚へハ無い」のに「梅ぼしが食べたくなって」慌てた、などと言う。そして、前の勤め先の小使い・忠二が来ると、共に姿を消したりする。

やがて、この学校も、新聞の探訪者^{たねとり}の「艶種製造島」となり、生徒が遠のき、潰れてしまう。弁当持参で職探しの毎日となったが、今度はうまく行かない。或る日、通り掛った毘沙門の縁日で、好きな阿房陀羅經を聴いていると、若い好男子が目につき、それとなく近付くと、たちまち手を握られて、牛肉屋に伴われる。

「流行者^{はやりもの}」かと疑われて、慌てて打ち消すと、金に困った女学生なら、儲け話に乗らないかと誘いを掛ける。女たちが集まって、「束髪好き」の男どもを客に、「演説会」を開いて「傍聴料」を取り、希望に応じて個人指導もする——という新商売で、なに、婦人雑誌の古い切り抜きでも使っていい加減にしゃべればよい、と言う。

そこで女四人が部屋を借り、新聞広告で「世の獣男^{けだものをとこ}」を集め、「えッふえる塔より高く」聴講料を取り、気のありそうな男には「をかしな目を向けて後^{のち}をたのしみに」交代し合ううち、人気が集まり、安料理屋からもお呼びが掛り、繁盛する。「世の変物^{おもしろ}の手遊物」にされるとも知らぬ両親は、実入りのいい娘を自慢し始めるが、そこへ忠二が押しかけ、約束通りに女房に、などと言うので愕然とする。半ば脅されて手切金を内済して帰すが、やがて娘の行状は「新聞の食ひ物」になる。数年後、芝仲門前の小使い宅に、どこからか嫁がやって来るが、それが24才になった志保子だった。

これと併行して「日本韻文論」が書かれていたことを思えば、この作は、文壇一の才子・美妙が遊び心で書き飛ばした筆のすさびにすぎず、『腐れ玉子』に劣る万々」とされ、「悪風を筆誅するにも、今少し書き様のあるものを」と評されたのも当然である。¹⁷⁾ が、それはともかく、女学校の増加で「需要が足らぬ今日」ゆえと作者が皮肉る、教師の質の問題が、実際にあったかもしれないし、「束髪あたまに遭へばあれもさえだと言ひ嘶す」世間の、女学校への風当たりと、教職をほとんど唯一の生計の道とも、有利な結婚への条件とも考える娘と親の功利主義は、たしかに当時の現実だったろう。

「国民」育成の基礎となるべき『教育勅語』が出たのは、『教師三昧』と同じ月だった。政府による教育の管理・統制への歩みは、着々と積み重ねられていた。特に児童、それを育てる母たるべき女子のための指針が、とりわけ『幼学綱要』（15年）と『婦女鑑』だったが、新たな勅語は、国会開設（23年）に対応して、「国家」意識の形成を求める。

XII.

耶蘇系批判は、欧風偏重が、小国民を育てるべき女子を害なう、というにあった。三輪田真佐子らによる24年発刊の、その名も『女鑑』と題する新雑誌は、明らかに女学雑誌に対抗するもので、「男女同権の僻説」と「女子独立の謬見」が、「国を蠹し、家を賊する」として、「夫、外事を治め、婦、内事を治める」女徳を壊敗せしめるものは、「西土鳥跡の字」と「南蛮鳩舌の音」に毒された女子教育に在る、と指弾した。¹⁸⁾『国民之友』は、一種の中庸の立場で、そんな単純化はせず、良妻賢母主義への偏りを批判し、茶の湯・插花・小笠原礼式・唱歌などは枝葉にすぎないとしつつも、「ここ四、五年來の女学熱」は、「一種の狂花」であり、女学校はしばしば、その熱に浮かされた「一夜作りの間に合ひ物」にすぎぬと批判する。そこでの「不思議なる貴族的教育」は現実の「生活社会に不入用なる、否厄介なる、一種の不生産的人物」を作るにすぎず、「只外国の標本」に頼り、「日本文学には一瞥の勞を与るに過ぎざる」ごときで

は、端書や請取状さえ満足に書けなくなる——と言うのである。¹⁹⁾

けれども、教育勅語と美妙の作が出た翌月の女学雑誌には、世間から総攻撃を受けている女学生の側に立ちつつ、現実的な戦略を説く論説が現われた。その名も題して『生意気論』と言う。²⁰⁾ 筆者は、誰だろう、ほんの7年前には超生意気娘の最たる者として、民権運動に名を馳せた中島湘煙だった。彼女はフェリスで教鞭を取る傍ら、かつての同志・中島信行の妻であり、二人は結婚の直前に洗礼を受けていた。第1回の衆議院選挙で当選したばかりの信行は、この一文が出た翌月には、初代議長に選ばれる。もっとも、温厚過ぎた彼は、散々に愚弄されたらしい。

湘煙はまず、「少なからざる女学生中賞譽すべきもの多くある」のに、世人が「生意気なりとの総括した一語」を以て非難するのを嘆き、「生气」に「意」の一字が加われば忽ち貶し言葉に転ずるのを、不思議だと皮肉る。彼女が例に挙げて、これが果して「生意気」かと問う、女学生の行動例は、次のようなものだった。

1. (緑日の猿のように) お辞儀をしない
2. 無雑作な束髪
3. (人の物問うとき、) はっきり答える
4. 疑わしきに問うをためらわない
5. 会合などに遠慮なく出る
6. 友人同士が訪ね合う
7. 漢語英語交りに談話する
8. 女権拡張説を唱える
9. 上について文を綴る

このリストを見れば、隔世の感に堪えないが、百五年前の女学生生活がいかに不自由だったかを、如実に物語って興味深い。若かりし頃に、「^{はこ}函入娘」は「虫入娘」となりかねないと痛烈に論じた湘煙も、今は27才の中年主婦となり、連れ子を育ててさえ居り、後輩たちに忠告も与えもする。世間が辛く当るのも

「善く導くため」と解するゆとりを持って、と言い、「冤罪」を蒙らぬよう「更に慎しみに慎しみを加へ」て、「外部の如何に意を用ふ」べきで、知ったかぶり・聞きかじり・思いあがりを戒める。言わば戦術的な配慮をも授けると同時に、実力を強める奮励努力を、先輩として説いたのだった。彼女は、名流婦人となつてなお、筆を捨てず、かつて体験した「女官」生活を、齒に衣着せず批判もした。

女性たちの政治的権利は、国会選挙の年にも、拡大どころか、改めて釘を刺された。というのも、選挙権が女子に与えられなかったのはもちろん、同時に公布された集会及政社法は、女子の政治活動そのものを一切禁じ、しかも、11月の初の国会は、傍聴すら女子に許さなかった。これに大いに憤激したのは、かつて景山英子の同志として民権運動に加わり、今は明治女学校に籍を置きつつ女学雑誌の記者たる清水豊子（→紫琴）である。彼女は、女子が政談集会に参加すれば育児家政を怠るとの説に対し、では職業を持つ男子はどうかと反論し、良妻賢母論を逆手に取って、政治的関心は、「夫を扶く上に於ても是非必要」と論じたが、国会傍聴禁止は「男子てふ一部の人間が、恣に女子てふ一部の人間を压制する」ことであり、万機を衆議に決するの立憲精神に反し、「我国の大不利」と断じた。²¹⁾

翌24年から25年にかけては、内村不敬事件・熊本洋学校事件・久米事件が相次いで起きる。国粹派の攻撃は、32年に始まる筈の「内地雑居」への恐れに基づくもので、とりわけ、青年男女を惹きつける基督教とその影響下にある学校を標的とした。内村は人も知る耶蘇信者であり、熊本洋学校もまた、小崎弘道・金森通倫・海老名弾正らの母校である。

国会開設（23年）の頃、信者は3万2千、教会は3百に及び、全国31の高等女学校（3,120人）の大半は耶蘇系だったが、すでに述べた「教育反動」によって大きな打撃を受け、27年には14校・2,314人に激減した。最も古いフェリス女学院の場合、21→29年の8年間に、185→35にまで減ったし、新潟女学校のように廃校の例さえあった。²²⁾ 新聞は「醜聞」を撒き散らし、雑誌は「国風」を叫び、

政府は「宗教教育」を排して、教員免許その他の扱いで差別を強めて行ったのである。この締め付けは、32年の私立学校令・中等学校令・高等女学校令・訓令12号の4点セットで完成した。「課程外」の宗教上の教育・儀式さえ禁止し、文相に「認可」と教科書「検訂」の権を与えたのである。これは、33～5年にかけて若干緩和されたが、基督教系の中学・高女に深刻な打撃を与え、立教中学や東洋英和女学校などのように、基督教の校是を捨てた学校まであった。

略年表：女子教育政策と周辺事項

※（ ）内の数字は月

年号（明治）

- | | | | |
|-------|------|------------------------------|--------------------|
| 4 | (11) | 五少女を米国に派遣 | |
| 5 | (9) | 学制発布（男女平等の義務教育） | |
| 6 | (12) | モルレーの上申書（女子教育の重視） | |
| 8 | (11) | 東京女子師範学校設立（→23年、東京女高師に） | |
| 12 | (9) | 教育令（男女別学、小学校に裁縫科） | |
| 15 | (7) | 東京女子師範附属高等女学校（唯一の官立女学校） | |
| 18 | (12) | 森有礼文相、「良妻賢母」論 | 〔(7)『女学雑誌』発刊〕 |
| 19 | (12) | 帝国大学令
高等女学校生徒教導方要項 | 〔(12)東京基督教婦人矯風会設立〕 |
| 20 | (6) | 『婦女鑑』（宮内省、全国の女学校に頒布） | |
| 22 | (2) | — 帝国憲法 — | |
| 23 | (3) | 東京女子高等師範学校設立 | |
| 〃 | (7) | 国会開設
集会及政社法公布（女子の政治活動の禁止） | |
| 〃 | (10) | 教育勅語発布 | |
| 24 | (12) | 中学令改正（「高等女学校」を初めて規定） | 〔(8)『女鑑』発刊〕 |
| 26 | (7) | 女子教育に関する訓令（女子就学の奨励） | |
| 27～28 | — | — 日清戦争 — | |
| 28 | (1) | 高等女学校規程 | |
| 30 | (10) | 女子高等師範学校規程 | |
| | (12) | 男女別学の訓令 | |

XIII.

もっとも、女学生に好意を示した小説も、なかったわけではない。美妙の作の半年前に連載された大橋乙羽の『京屋の娘』（読売新聞、3～4月）では、こうした時期にもかかわらず、脇役ながら、新教育を受けている女学生が、むしろ肯定的に描かれている。ヒロイン・お香は、甘やかされた老舗の一人娘で、親が婿にと見込んで養子とした堅実な慶三郎よりも、清元の師匠の許に出入りする、口の巧い色男に惹かれ、遊芸の世界に浸っていたが、慶三郎の妹・お糸とその女学校仲間・お花の会話について行けない自分の無知に、愕然として、勝ち気ゆえに深く恥じる。お花に借りた聖書・伴われた教会での説教・信徒の真摯にも感じ入り、まったく未知だった世界に新鮮な喜びを感じた。これまでの自分が急に愚かに見え、婿養子の愛情と誠実に応えようとする。

耶蘇の教で忽ち真面目娘に変身するあたりに、些かの臭味があり、短篇のせいもあって、転換が唐突すぎるが、「洋学」や「耶蘇」に傾く女学生にあまり好意的とは思えない硯友社の古参である著者が、こうした作を、しかもこの時期に書いたのは、少し面白い。

硯友社らしからぬと言えば、次の年に話題となった石橋思案の『わが恋』（『千紫万紅』、6～8月）も、そうである。これは、当時ではまだ目立つ言文一致体の一人称で書かれた、淡い初恋の追想記だが、相手は、母校の音楽学校でも教える、無邪気で明るいヴァイオリニストである。「女学」のことで訪ねた或る女教師から、その妹である彼女への英語教授を頼まれた「私」は、代りにヴァイオリンを教えてもらう。彼女は慎ましく、しかも「至極真率」で「虚飾がない」し、その微笑みには、やさしさと屈託のなさが、よく表われている。帰りが遅いと家人が心配しているのに、笑いながら現われて、「さう早くは歩^{あるけ}行ませんもの」などと、少し甘えた口調で言う。

しばらく御無沙汰しているところへ、彼女から音楽会への招待状が届き、行ってみると、或る紳士に迎えられ、案内される。遠くから私を見つけた彼女

と言葉は交せなかったが、彼女は黙って目礼してくれた。傍に居た友らしい女性を牡丹とすれば、その姿は、「^き色垣に寄りかかった萩の花」の風情があった。だが、一年後、通りを歩いていると、人力車に乗った「けばけばしい服装の」婦人から挨拶される。それは、例の紳士と俤を連ねた彼女だった。

主人公がしばらく彼女を訪ねなかった事情は明らかでないし、慕情がはっきりと描かれているわけでもない。だが、この作のすがすがしい印象は、恋する心が仄かにしか描かれてないのにもまして、ヒロインの無垢な性格と、ほろ苦い哀感の余韻のゆえである。先に触れた美妙の作とは対極をなし、淡い色で上品に染めあげられているあたりが、翻訳や児童文学に傾いて行った思案の、数少ない小説の代表作とされるゆえندろう。

だが、「男女交際」や「自由結婚」の語は早くからあっても、“Love”の訳語としての「恋愛」という語も、まだ日常のものではなかった。²³⁾ 柳父章に依れば、これが現われる早い例は、巖本の一文で、23年のことだが、それが『舞姫』刊行の年でもあったのは興味深い。だが、巖本は、「深く魂（ソウル）より愛する」こととしての「ラブ（恋愛）の情」を、「不潔^{アソシエーション}の連感」に富める日本通俗の文字」としての「恋」から峻別し、「最も厳粛に使用」すべきだとしたのであり、このピューリタンの理想は、その後普及する用法では脱色されてしまう。ところが、翌年、同じ耶蘇派の自由主義者だったはずの蘇峰は、「恋愛何物ぞ、男女交際何物ぞ、自由結婚何物ぞ」と反論し、巖本は直ちに「恋愛は神聖なるもの也」と応じた。この間、女学雑誌には、恋愛讃美の文が、幾人かの寄稿家によって書かれた。

「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり」なる名文を人口に膾炙させたのも、この同じ雑誌であった。25年2月のことである。若き読者であった木下尚江は、「まさに大砲をぶちこまれた様な」気がした、と言う。それほど衝撃を、当時の青年たちに与えたのだった。男子よりもはるかに身と心を縛られていた、夢見る娘たちにとって、どんなに大きな励ましとなったことだろう。が、新たな夢と、「家」制度と「婦徳」教育の矛盾に、彼女たちはいっそう深く

苦しむことにもなる。

この名文句で始まる論説『厭世詩家と女性』の筆者は、民権運動くずれの耶蘇派詩人・透谷だった。2年前から普連土女学校で教えていた彼は、明治女学校を退職した島崎春樹（→藤村）の後任となっていたのである。

この論説が若い魂をゆさぶったのは、単なる恋愛讃美などではなく、芸術と宗教がそれに属する「想世界」と俗なる「実世界」の、埋め難い乖離の狭間に苦悶する詩人の痛切・深刻な哀しみだったろう。恋愛が「思想を高潔ならしむる嬌母^じ」として、「想世界の敗将」たる厭世家の「牙城」となる。が、恋人との婚姻は、「狂愛」を「静愛」へと移らしめると共に、実世界の束縛を教え、「忌はしき愛縛」の重荷と転ずる。かくて、愛する妻を苦しめ、それを見てまた苦しむことにもなる。

実際、年下の詩人から「女神」とも仰がれて妻となった石坂ミナは、どんなにか辛かっただろう。彼女は、横浜共立女学校を出た敬虔な耶蘇信者であり、透谷は、彼女への熱愛と畏敬を通じて、信仰へと誘なわれたのだった。幼な児を抱え窮迫の生活に耐える彼女の姿は、藤村の『春』や『桜の実の熟す頃』に垣間見られるが、夫の名の陰に隠れたその肖像は、江刺昭子が描くまで永く忘れられていた。²⁴⁾「人生に相渉るとは何ぞ」と昂然超脱する詩人の背中には、「^{インナーライフ}内部生命」に従うこともできぬ妻の忍び泣きが聞こえる。「自由結婚」し得た女学生の幸運は稀れだったが、「文学士」・「文士」の妻の幸福は更に稀れである。が、「浪漫」の歌を朗々と、しかも哀切な響きを伴い奏でる詩人に、女学生が惹かれるのは当然である。透谷は、前の勤め先での教え子・富井まつに深く思慕され、彼女の病死は彼の精神の変調の一契機ともなった。新たな勤め先では、斉藤冬子を熱愛したが、彼女の夭折に先立って透谷は、妻子を残して縊ってしまう。ミナは、宣教師の許に身を寄せた後、32年に米国に留学、40年の帰国後は女学校で教えつつ、伝道の生涯を送った。

明治女学校には、恋の花々が咲いた。透谷の前任者であり後任者ともなった藤村は、筆名に「藤」の一字を添えたと伝えられるほど、佐藤輔子との愛・別

離、そしてその夭折に、深く傷心した。二人の詩人教師の先輩・友人にして、巖本の右腕でもあった星野慎之助（→天知・破蓮坊）は、広瀬恒子の積極的な接近を拒けたが、紹介した藤村と恒子の格別な親近には一言なきを得なかった。彼が深く信頼し敬愛したのは、輔子の親友・松井まんである。

まんの、どっしりと重厚・沈着なところを、洗礼を受けながら禅に熱心な剣と書の達人・天知は、大いに尊んだ、と述懐する。²⁸⁾ まんは、小林聖心女学院の名学監となり、第二次大戦中の基督教学校弾圧の際、踏み込んだ何十人もの刑事たちに、泰然として応じた。

この若い教師たちにとって、恋愛の神聖化は、「内部生命」の昇華たる「美」と「崇高」への憧憬、それに相伴する「反俗」と、一体のものであった。そしてそれは、10年代からの洋化思想を窓として触れた欧州の「ロマンティズム」から、新鮮な刺戟・鼓舞を与えられてのものだった。言うまでもなく、その思想的体現が、『文学界』の創刊に外ならない。

女学雑誌社は、『通信女学』（20年）に引き続き、『女学生』（23年）を出したが、文芸熱の嵩じた星野若手教師たちはそれらに飽き足らなくなり、また、巖本の性格と文芸観への批判も芽生え、遂に、文芸専門誌を発刊し、『女学生』を廃刊吸収したのだった。それは忽ち、先行の『志がらみ草紙』（22年）、『早稲田文学』（24年）と拮抗しつつ、「浪漫主義」の旗手として、20年代後半の若々しい成長尖端ともなるのである。

XIV.

明治女流文学の最高峰として宣伝されることになる一葉も、もっぱら、この雑誌の同人たちに注目されて、世に出たのだった。が、半井桃水を誤解して自ら身を引き、なお思い切れずに悶々する一葉に、秘かな羨望の念を抱かせていた、2才下の閨秀が居た。それは、境遇・性格共に対照的に、富裕と美貌に恵まれ、華やかな装いと奔放な行動によって話題の主となった、田沢錦子（→稲舟^{いなふね}）である。28～9年にかけて、スキャンダラスな異名を馳せた「生意気」令嬢の双

璧は、この稲舟（21才）と、佐々城信子（18才）であった。

鶴岡の医家の令嬢・稲舟は、親の決めた婚約を破棄し、廃籍を敢えてして上京後、16才で流行作家・美妙の弟子となり、28年に結婚し、親の承認を取りつけたが、美妙の祖母と折り合わず帰郷し、離婚して、たちまち夭折した。彼女は、医業を継ぐことを拒み、文芸誌に投稿を始めて間もなく、共立女子職業学校の図画科に籍を置いたが、美妙に憧れて指導を受け、共作もした。ところが、多情なこの師は、女性関係ゆえに逍遙その他の非難を浴びる人物だったし、その渦中に、出奔の令嬢たる女弟子と結婚したので、二人は大いに話題となったのである。しかも、帰郷・離婚した稲舟の病臥中に、美妙は芸者と再婚したので、彼女の死は服毒自殺だとも噂された。だが、彼女は、少なくとも公けには、病床で筆を取ってさえ、師を庇い続けたし、ともかく「閨秀作家」として、しばし時めき、短い命の炎を燃やしたのである。

稲舟は、20年代半ば、美妙と親しくなって3年後から、新作浄瑠璃を何本か書き、暗殺された金玉均を慕う女性を描く特異な作『消残形見姿絵』もあるが、初めての小説は『医学修業』（文芸倶楽部、28年7月）だった。

花江は、名高い資産家の令嬢だが、入贅の父親の隠し子であり、引き取られて異母妹と暮している。類なき美貌に加えて「学問遊芸何一ツつたなからぬ」彼女に妹は大いに劣り、義母は快からず、皇女の侍医として有名な女医の許に、本人の意志に反して、弟子入りさせる。義母は、書生には夜具も着物も要らぬからと支度もしてやらず、迎えない限り帰らなくてよいと言い渡した。花江は、家は継げないし、「えせ信者」や「軽薄才子」も内心は腐敗して、「何とてさるけがらはしきものを夫として、清き心^{つま}をけがさるべき」と思い、いつかは絵描きか文学の研究で自活したいと、考えていたのだった。

師匠たる女医は、「羽子板に目鼻をつけた」ような顔で、お茶の飲み方も「無骨」で「つやがない」上に、書生仲間の女たちも下女も意地わるく、食事も家屋もひどく、雑用にこき使われる。で、医学の勉強する気もない花江は、ひまだと江戸の草紙を読んだり、絵を描いたりしていた。

本郷医学校に通うことになったが、学生の不品行が評判で、男たちは野卑で授業中の態度もわるく、「片隅に設けられたる婦人席」の女たちは、「もらひてのなさそうな」連中で「やさしく床しき所なき」と見える。で、学校に行かず、図書館や植物園で時を過ごすことにしたが、ついに部屋に閉じ込められ、彼女は脱走する。3年後、自作の浄瑠璃を演じて大人気の美人義太夫語りが噂となり、塾の師弟が行ってみると、それが花江だった。

女医の名が吉岡弥生そっくりだったり、義太夫語りの名は樋口一葉をもっていることはともかく、この作は、総じてがさつな印象を与え、話が整理されていない。だが、花江の行動力とその自立の方法は、はなはだ異色と言わねばなるまい。

稲舟の作のヒロインたちは、いずれも激しく生きる意志の人であり、彼女自身の性格そのままと評される。同世代の樋口一葉の主人公たちが、辛い運命に哀しく従うのとは、対照をなす。『しろばら』（文芸倶楽部、28年12月）の光子は、貴族院議員の娘で、「未来の女学者が、肩で風切る高慢顔に、鼻うごめかして男女同権を主張」して「口きたなくさへづりちらす」と書生たちに悪口される、岸本英和女学校の生徒だが、無実の罪を種に脅して誘惑する校長の頬を打ち、退校した。無実の罪とは、男の筆で書かれた彼女宛の封筒に入っていた芸者の手紙に、恋人を横取りされた怨みが記されていた一件である。実は、芸者の恋人は、伯爵の息子・従兄の篤麿で、手紙は光子に惹かれた彼の奸策だった。彼との結婚を薦める父親に、彼女は「国家を思ふ情の薄い」華族なんか「害があるばかり」と言い、本人に相談なく承諾したのを咎める。もともと「きたならしい劣情」が潜む恋愛も結婚もきらいで、「生み出されたのが無上の怨み」なのである。

父親に勘当を申し渡され、光子は家を出たが、謝りもせず、涙も見せない。養育の恩は感じるし、独りになると泣いたが、やがて、家族の写真と短刀を懐に、「足音荒く思い切て」出たあと、乳母を訪ねるが、お説教をされ、新潟の祖母の許へ行こうとする。だが、お付きの女中と篤麿に謀られ、直江津の宿屋で

クロロホルムを嗅がされ、凌辱される。やがて、海辺に彼女の屍が打ち寄せられた。

この作は衝撃的で、鷗外は「あの顔にてこれをばよも」と呆れ、緑雨は「真に女性の作ならんにはいよいよ以て言語道断」と怒りさえした。彼らは、一葉をこそ高く評価していたし、大方は、「清らかなものの凌辱」を好む美妙の影をそこに見たのだった。同郷の先輩・高山樗牛も、「淑徳ある作者の品性に於て累を為す」と忠告した。²⁶⁾ 評者たちは、性に対する^{ダブル・スタンダード}二重規範にこだわったのである。

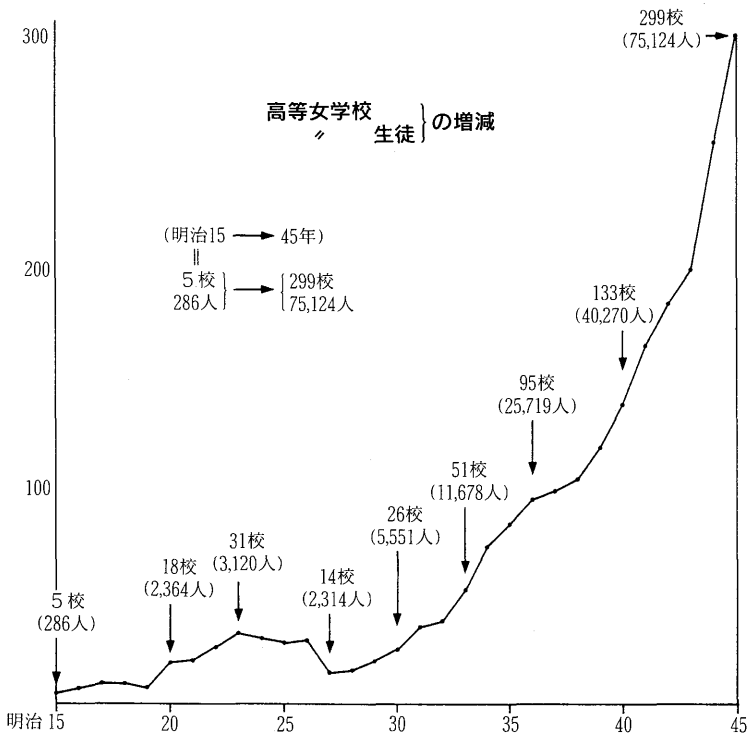
もちろん、稲舟の文辞の粗放・嬌激を指摘せぬ者はない。だが、80年の後に丹念な評伝を書いた伊東聖子は、「透谷の内部生命的な深い眠つき」の気配を察したところで「命果てた」この才女を惜しむ。²⁷⁾ 婦徳主義の圧倒的な風潮の下で、彼女とその作品のヒロインたちは、果敢に抗してエゴを貫いた。「生意気娘」の華である。だが、結婚生活は4ヶ月で破綻し、病いにも勝てなかった。稲舟は、一葉の死に先立った。享年22才である。

同じ頃、花形作家との恋愛事件を起した娘が、もう一人居る。フェリスに学んだ基督教婦人矯風会の大幹部・佐々城豊寿の長女・信子である。豊寿は、妻ある医師との間に信子をもうけ、女権のために演説し、女学雑誌に寄稿もする女傑だったが、賑やかな社交を好み、正式に医師夫人となっても、自宅に各界の人士をよく招いた。海岸女学校に学んだ娘は、出入りしていた新進の文士と恋し合い、3ヶ月後には塩原温泉へと駆落ちし、一族が出席を拒んだ結婚式を、強引に挙げた。相手は、日清戦争の従軍通信で注目されたばかりの若き独歩である。

だが、28年11月に植村正久牧師の司式で結婚した二人は、4ヶ月後には破局を迎える。夫は透谷の自責を、妻はミナの忍耐を、欠いていた。18才の信子は、独歩の横暴・貧しさ・性的なしつこさに、幻滅・憤激し、「詩人の妻」の生活をあっさり見限った。が、稲舟と同じく、その自我と意志の強さが時代を超えていたにすぎない。

こうした実在・仮空のヒロインたちは、自己に忠実たらんとして世間の指弾を浴びざるを得なかった。だが、それは、軛に繋がれてひたすら「良妻賢母」たれ、と教え込まれながら、女学雑誌の女権思想や『文学界』の浪漫主義に心惹かれていた筈の、娘たちの満たされざる思いを、結果として代弁するものだったろう。

20年代半ば、基督教系を中心として女学校が受けた打撃は、深刻だったが、娘たちの進学熱は強まる一方だし、文教政策も、「婦徳」強化を国力向上の一要素としたから、高等女学校数は、公立を中心として27年から再び増加に転じ、日清戦争後は急増し続け、生徒数は、26年からの5年間に5倍増した。当然、20年代に簇生した文芸雑誌も、増加する女性読者に大きな関心を払わずに居な



い。そこで、28年に『太陽』と同時に創刊の『文芸倶楽部』は、その年の12月号を始め、29年8月・30年1月と、三度に亘る「閨秀小説」特集を組むに至った。そのいずれにも名を連ねたのが、一葉と稲舟なのである。

XV.

20年代半ばは、「文学」の存在理由・在り方をめぐる論争が、逍遙と鷗外、愛山と透谷の間で展開され、写実と理念、社会と芸術の関係が問われた。だが、やがて、「殖産」の代価たる社会問題への関心が、「最暗黒之東京」（26年、松原岩五郎）や、「小説と社会の隠微、下流の細民と文士」（28年、田岡嶺雲）などに表われ、浪漫主義の一分枝ともされる「悲惨小説」や「深刻小説」も現われ始めた。そして日清戦争になると、「従軍記」が流行することになるが、戦前・戦後の産業化は、家庭の内と外に新たな問題を生んだ。

そこで、硯友社系や文学界系に対する批判を込めた「社会小説」の主張が現われる。「社会小説論」（30年、島村抱月）に始まり、「所謂社会小説を論ず」（30年、高山樗牛）、「所謂社会小説」（31年、金子筑水）など一連の評論が、「家庭小説」の流行の直前に書かれていた。その一つの例と文芸史家が見做すものに、内田魯庵の『くれの廿八日』（「新著月刊」、31年3月）がある。『金色夜叉』登場の1年後だった。

夫の純之助と親しい静江を嫌う妻・お吉は、新聞が書く「近ごろの女教師や女学生」像に毒されており、「生意気な耶蘇ッ臭い人が猫を被って」て、それを「お俠だきやんって生意気だきやんって活発だとか学問があるとか」言って迷う男もあるから、と、静江をいかがわしい女と見ている。彼女は純之助と「骨肉しんみの兄妹同様」で、耶蘇の学校に勤める女教師なのである。菌に衣着せず純之助を批判する率直・活潑な性格だが、嵯峨の屋が諷した文子のような無頼派とは対照的に、信仰を人生の拠り所とする信徒である。

純之助が責められるもう一つの理由は、俗っぽい妻に嫌気がさし、メキシコ開拓の事業などに心が飛んでいるからである。静江は、パウロの言葉を引いて

「不信なる妻は其夫に由りて潔くなる」と言い、「人^{ヒューマニティ}道^{ラフ}を説く人」が「愛を殺して家庭^{ホーム}を軽蔑」するのは、いっそう「罪が深い」と非難する。説き伏せられて純之助は、「運命に黙従して正義の道を踏んで行く」と誓う。

けれども、静江の微妙な内面も、作者は仄めかす。上野の森を散歩する二人の会話の途中で、養子に入った自業自得を悔いる純之助の言葉に、じっとうつむき耳傾ける彼女の目はうるみ、「悉皆^{みんぱ}神様の攝理ですワ」と言いつつも声は曇り、「既^もう神様にお委せ申して基督の御心に随って生涯^{ハンカチ}働く身」だから、お吉に誤解を解いてもらうよう努める、と語って目のふちを手巾で拭う。そしてにわかに、明るく笑い、「妾^{めかけ}まで真面目臭って」と照れたあと、沈む男を促し、笑みを浮かべ、ぴたりと寄り添い、歩き出す。

静江の背後には、20年代初めに「一夫一婦」制の、30年には「男子姦通罪」制定の、請願運動を起した基督教婦人矯風会の影が感じられるが、メキシコ開拓の夢を捨てて豪傑風の同志から純之助が非難されるあたりに、日清戦争後の「拓殖」熱への諷刺もあろう。これを同時に「光明小説」たらしめたのは、「事業」の美名に隠れる「功名心^{アンビション}」への静江の批判だった。が、また、恋愛至上主義に対する「家庭道德」の反撃でもあろう。

魯庵は、ドストエフスキイの事実上の紹介者だが、若い頃は教会に通い、フルベッキの説教の通訳もし、植村正久を通じてトルストイにも親しんでいた。息子・巖によると、祖父の蕩尽への反動からか、家庭を大事にしたという。恋人に諭されて「大志」を捨て、妻を疎んじたことを反省する主人公は、当時として異例だった。が、この直後に彼が主張した「社会小説」の名にふさわしいのは、政治（家）の裏面を描いた他の作品群で、それに較べれば、この作は、中村光夫も指摘するように、むしろ、家庭小説と呼ぶのがふさわしい。²⁸⁾

家庭小説の流行は、この8ヶ月後に連載が始まった『不如帰』あたりからだろう。もちろん、特に、急速に拡がる女性読者層の感傷に訴える、新聞小説の類だった。波子への同情は、モデルたる大山巖夫人・捨松が殊更に意地悪な姑として描かれたせいでもあるが、この作は、米国留学婦りの姑と、「国粹保存」

期に女学校を出た嫁の、世代葛藤も仄めかす。人道主義の作者は、弱い嫁の側に立つが、この世代対立の質は、今日から見れば、いささか特異なのである。

だが、家庭小説の代表とされるのは、翌32年に現われた菊池幽芳の『己が罪』（大阪毎日新聞）である。ここでは、女学生時代に誘惑され、裏切られたヒロインが、秘密を抱えて苦しむ。冒頭で、女学生が噂話をするところへ通り掛った環は、お腹が大きいと、からかわれる。彼女は大阪の豪農の娘で、裁縫教師・小枝子さえだこの許に止宿していて、小枝子がしきりに褒める医学生・度三に、ひそかに心惹かれていたが、『しろばら』の場合と同じように、小枝子に誘われて赴いた箱根の宿で、「瀆れた」身とされたのである。

もっとも、福島の素封家の息子たる度三は、結婚の口約束はしたのであり、実家を気にして執拗に迫る環に押され、通っていた教会の牧師の力を借り、内密に「神聖な誓」を立てて、環を独り住まいさせる。来年卒業すれば正式に、と説得したのだった。

だが実は、彼は、「恋愛の神聖を説けるクリスチャン基督教徒」でありながら遊興に耽り、医学の勉強は熱心だが、「恋愛即肉慾論」を唱える「冷酷なる無情男子」なのだった。露知らぬ環も、やがて度三を頼って上京したお島なる女性が、彼の婚約者だったと知り、絶望して川に身を投げようとするが、老婦人に助けられて、房州に住むその知己に、産んだ男の子を預け、実家に帰る。

しばらくして縁談が持ち上った。相手は彼女の進学を父に奨めた国会議員の姻戚で、文学士の子爵・隆弘である。彼は、「罪悪のためには全く人情を顧みざる」道德家で、書生と通じた妻を離縁後、「風俗改良女子矯風事業」から身を引き、貴族院も辞し、東洋を旅して印度哲学に触れて帰り、隠棲中だった。

「罪ある身」に悩む環は、もちろん固辞したが、周囲に押され、告白の機を得ぬまま、嫁して子を産む。隆弘は心和み、妻を大切にすが、環はかえって深く苦しみ、神経を病んでしまう。夫の命で、気の進まぬ箱根に、療養に行くと、子供がチフスに罹り、専門医を紹介されるが、それが高名な博士となっている度三だった。結婚したお島と死別していた彼は、強引に、半ば脅しながら復縁

を迫り、環は断固として拒むが、恐怖に苛まれる。

だが、新たな悲劇が、更に彼女を追いつめる。転地療養先の房州で、預けたままだった息子と偶然めぐり合い、真実を明かせぬうちに、彼と連れて行った息子は親友となるが、溺れようとした後者を前者が助けようして、二人は共に波に呑み込まれた。

あまりの悲痛に耐え切れず、遂に環は、離縁を覚悟して夫に秘密を打ち明ける。隆弘は虔三にその子の死を報せてやり、環には離縁を言い渡す。虔三は初めて罪を悔い、環に許しを乞い、隆弘に対して彼女を弁護するが、「主義に従って進退する」隆弘は、罪惡への憐憫も一つの罪だと言う。が、環の父が自殺し、その遺書に彼の心は揺れ、離縁を思い止まり、別荘と財産を環に与えて、自身は帰らぬ覚悟で印度・西藏へと旅立つ。

しかし、家庭小説は大団円を要する。台湾赤十字社の特志看護婦となった環に、安南でチフスに罹った隆弘が、献身的な看護を受け、己れを恥じ、互いが罪と苦痛によって心を「洗^{ビウワフアイ}滌された」と知り、彼女を「救世主」とさえ呼んだのだった。

『金色夜叉』は前々年、『不如帰』は前年と、それぞれ大人気を博したが、菊池のこの作もそれに劣らず、その後、繰り返して劇場で上演され、一世を風靡した超ベスト・セラーとなった。波子は夫の愛を信じ続けられたし、お宮の選択は親に祝福されたが、裏切られ、「罪」の悪循環に悩む環の悲劇は、さらに深刻である。明治小説の中で、これほどに罪の意識に苛まれたヒロインは、あるまい。

幽芳は、女学校出の悪女が登場する『乳姉妹』（36年）でも、「罪」を問題にするが、学生時代の幽芳が一時は基督教に傾倒したことを思い合わせることも、必要かも知れない。2年後に中村吉蔵（→春葉）の『無花果』は、過去の罪に苦しむ牧師と、教会を取り巻く人々を描いたが、そこでの基督教は、単なる味つけやファッションではない。が、環の罪の意識は、純然たる基督教のそれとは見えない。世間を憚る羞恥の念が混ざったものであり、当時の女性が置

かれた状況の時代的所産の面が強い。けれども、隆弘の「宥し」への動機や、特志看護婦となる環の選択には、基督教的ヒューマニズムを見ることもできよう。甘い結末ではあるが、「華族」の自縛を振り捨てた隆弘も、新しい大胆な思想の持ち主だし、苦悩を乗り越えた環も、稟とした女性に変身している。

XVI.

『己が罪』のヒロインは、進学し、「上京」した下宿生だった。女学生の下宿は「墮落」の原因とするのは、すでに20年代初頭に現われた説だったが、皮肉なことに、環を「罪」へと至らせた誘因は、彼女を止宿させた女学校教師がもたらした。東京の都市化・産業化と戦後経済の発展は、多くの若者を地方からますます吸い寄せ、女学校の増加は、当然、下宿する女学生を急増させた。女学生批判がいかに行なわれようと、それを止めることはできなかった。但し、もちろん、親たちを安心させる親戚筋に娘を預けるなら、と、反女学生論者も、それを次善としたのであった。

『己が罪』が出た翌33年は、小説界全体にとって格別の話題に乏しい。が、女性史にとっては、必ずしもそうでない。というのは、かつて7才で米国留学し、15年に帰国、海岸女学校や、華族女学校などで教えたあと再度留学した津田梅子が、女子英学塾を設立したからであり、これは、高等女学校より上級の専門学校として、英語によって女子が身を立てるスペシャリストの養成を目指したからである。つまり、すでに23年に生れていた東京女子高等師範と並ぶ、女子の最高学府として、民間初のものであった。それはまた、国粋保存の主張にかかわりなく、もはや、「英学」の必要は強まらざるを得なかったことを示す。同時に、女学校批判に伴う男女別学の確立が、女学校における女教師への需要を強めたから、とも言えよう。その意味では、今日のフェミニズムから見れば、手放して喜べるものではあるまいし、津田梅子は、リベラルではなかった。が、知的欲求の高度な女性にとって、教職か親の決めた結婚かの二者択一しか許されなかった当時としては、勉強好きの女学生を勇気づけるものだった。

その頃、7年前に堺高女を終えたあと、家業の菓子舗を手伝っていた鳳^{しう}晶（→晶子^{あき}）は、同人誌『よしあし草』（30年）に属して和歌の道に励みながら、藤村のデビュー詩集『若菜集』にも感動していた。彼女は、僧職の文学青年・河野鉄南にせっせと恋文を送っていたが、²⁹⁾ 前年に浅香社を離れて新詩社を興し、第2の妻・滝野の実家に出資を乞うて『明星』を発刊したばかりの、与謝野鉄幹（←寛）と出会うと、たちまち激しい恋に落ちた。鉄幹は、僧家に生れた縁で、仏教系初の女学校・徳山女学校に勤め、のちにそこでの教え子を強引に娶ったのだが、27年の閔妃虐殺事件の頃は、壮士気取りで朝鮮に居た。「妻を娶らば才長けて」のあの歌は、30年頃に朝鮮で作ったと言う。『若菜集』が出た年には、まだ「虎剣調」の歌人だったのである。だが、晶との出会いを機に、俄然、愛の讃歌を熱っぽく歌い始める。³⁰⁾『明星』への投稿では晶より先輩の山川登美子は、梅花女学校を出て母校に勤めていたが、この二人の女性は、互いに師・鉄幹への愛を認め合っており、三人は、この年の10月、有名となった「栗田山の一夜」を過し、登美子のみは、親の決めた結婚のため、別れを告げたのだった。男女関係一般や「良家の子女」の常識からすれば、きわめて稀れな一件である。

もっとも、地元の新聞にこの年まで連載されていた『己が罪』との関わりの有無は断じ難いが、耶蘇教とは無縁な筈の晶も、繰り返して「つみ（の子）」の自覚を、歌や文に語っているのは、一考に値しよう。環に乏しく晶に有り余るのは、強烈な「自我」であった。

19世紀は前年に終わったばかりだった。33年を以て、日本も「20世紀」に入る。次に来るのは、輝ける『明星』の浪漫主義と、やがて対立するかの如く現われる「自然主義」の全盛期である。

註

- 1) 高木健夫『新聞小説史』（昭和49年、国書刊行会）

この一書を除いて、その名を記したものはない。

- 2) 中断の事情は、最終回に篁村が付記している。読売新聞、明治21年11月22日
- 3) 三宅花圃「お茶の水時代」（明治文学全集第81巻、昭和41年、筑摩書房）←神崎清『近代婦人伝』（昭和15年、中央公論社）
- 4) 読売新聞附録、明治22年1月3日
- 5) 「閨秀小説家答（第二）曙女史」（女学雑誌、206号、明治23年、3月29日）
- 6) 前掲誌、115号、明治21年6月23日
- 7) 国民之友、明治21年7月6日
- 8) 宮本百合子、「蕨の鷺」（明治文学全集第81巻）←「婦人と文学」（「文芸」、昭和15年8月）
- 9) (4) と同じ。
- 10) 宮本百合子（8）の論評
- 11) 前田愛「明治の才女たち」（講座『日本女性史』6、昭和48年、評論社）
- 12) 塩田良平『新訂 明治女流作家論』（昭和58←41年、文泉堂出版）
- 13) 植村清花「曙女史、木村栄子の伝」（女学雑誌、237・238号、明治23年11月1日・8日）
- 14) 「濁世を読む」（女学雑誌、169号、明治22年7月6日）
- 15) この間の経過は女学雑誌202～7号及び村上信彦『明治女性史』中巻前篇（昭和49年、理論社）
- 16) 「能勢栄氏学校管理術」（女学雑誌、221号、明治23年7月12日）
「高等女学校扱む所の婿」（女学雑誌、165号、明治22年6月8日）
- 17) 撫象子の評、（女学雑誌、237号、明治23年11月1日）
- 18) 「女鑑」創刊号、明治24年8月→『日本婦人問題資料集成（4）』（昭和52年、ドメス出版）
- 19) 『国民之友』、明治24年11月→同上
- 20) 女学雑誌、241号、明治23年11月29日
- 21) 「何故に女子は政談集會に参聴することを許されざる乎」（女学雑誌、228号、明治23年8月30日）、「泣いて愛する姉妹に告ぐ」（同上、234号、明治23年10月11日）
紫琴の評伝としては山口玲子『泣いて愛する姉妹に告ぐ』（昭和52年、草土文化社）が貴重である。
- 22) 高等女学校の変遷については、桑原三二『高等女学校の成立』（昭和57年、高山本店）、深谷昌志『良妻賢母主義の教育』（昭和56年、黎明書房）が、もっとも詳しい。
- 23) 柳父章『翻訳語成立事情』（昭和57年、岩波書店）
- 24) 江刺昭子『透谷の妻』（平成7年、日本エディター・スクール出版部）
- 25) 星野天知『黙歩七十年』（昭和13年、聖文閣）

明治の「生意気娘」たち（中）

- 26) 伊藤整、『日本文壇史（4）一葉と硯友社の時代』（昭和30年、講談社）
- 27) 伊東聖子『炎の女流作家・田沢稲舟』（昭和54年、東洋書院）
- 28) 中村光夫『日本の近代小説』（昭和29年、岩波新書）
- 29) 晶（子）の結婚前のことは、（12）の塩田の著者や、河井醉茗の妻・島本久恵の『長流』（昭和36年、みすず書房）が詳しい。
- 30) 若き鉄幹論としては、別れた妻の夫となった正富汪洋の『明治の青春』（昭和30年、北辰堂）・永岡健右『与謝野鉄幹伝』（昭和59年、桜楓社）

Summary

The Insolent Daughters in the Meiji Era (II) : The Girl Student and the Novel

Sampei Koseki

In 1888, a girl student published her first novel. Describing the inside of a girls' school through everyday conversations, it satirized the "civilized" upper class. The next year, a longer and more serious novel by another young girl was written as a series in a leading newspaper. Its heroine ran away from home and went to Britain and America. After coming back to Japan, she realized her dream of founding an ideal factory where poor women could work in better conditions than prevailed at the time.

Though the two writers show a sharp contrast both in their lives and works, they shared a common attitude against "over-westernization" and womens' independence. However, it brought a contradiction in society. The nationalists, the newspapers, and the government began to ask for the revival of the "traditional" female virtues, not their independence.

A group of young teachers, nevertheless, were free from this "reaction." Led by liberal Christians, they admired art and "love," published a literary magazine, *Bungakukai*, and inspired young readers with European romanticism. It was through their influence that some girls' school graduates appeared in society as fresh writers. The readers, however, can easily imagine that such young girls had to struggle with the conservatives and scandal-mongering.